

縦割り創造活動 せ組

活動名「いのちのつながりを感じよう」

支援者 橘 慎二郎 先生

体験活動と価値創造とのバランスをうまく図ることで、総合的な学習の時間・道徳・特別活動の3領域を統合したよさが現われた授業でした。また、教室環境や外部人災や保護者との連携の図り方など参考になるところが多々見られました。

【子どもの活動】

- 1 これまでの活動を振り返り、育まれてきた価値について話し合う。
- 2 異学年との心の交流を通して、なりたいたい自分の姿について再確認する。
- 3 2をもとに、本時の活動のめあてを立てる。
- 4 大切にしたい見方・考え方をもとに共通体験を行う。
- 5 本時の活動を振り返り、育まれた価値のものについて共通理解する。



これまでの活動を振り返り、本時の見通しを持つ



友達のノートを見て、思いを分かち合う



交流を通して価値を育み、なりたいたい自分の姿を確認する。



学年を超えた自然な関わりの姿



めあてを意識しながら共通体験に取り組む



新たな価値のものが生まれてくる

【橘先生コメント】

今回の実践を通して「個に寄り添うこと」の意味をまた深く考えるようになりました。まずは一人一人を見て、そのよさや伸びを肯定的に受け止めることだと思います。縦割り創造活動における教師の役割を3つ挙げるとするならば「状況をつくること」「橋渡しをすること」そして「信じること」ではないかと今は思っています。縦割り創造活動も、研究会までで考えると残りわずか35時間程度です。一日一日の学びを大切に積み上げていきたいと思っています。

橘実践【せ組 縦割り創造】

～いのちのつながりを感じよう～



本実践の主張点

子どもが自己や集団にとって意味のある価値を創造する

見方・考え方を育むために

方策Ⅰ：「何を」「どのように学び」「何ができるようになるのか」について整理する。

方策Ⅱ：子どもの認知モデルを基に、支援の在り方を明らかにする。

「何を」「どのように学び」「何ができるようになるのか」で整理することについて

◆「何を」「どのように学び」「何ができるようになるのか」の3つの視点から整理することについて

教科学習と同様に、縦割り創造活動でも取り組まれた。私自身はそのように取り組む良さとして、それぞれのプロジェクト活動を自己評価する機会になると考える。例えば、橘提案では「何を学ぶのか」については、内容の要件との関連から整理されている。今現在のプロジェクトは、内容の要件で想定したことと、どの程度関連をもって行うことができているかを振り返ることで今後の見通しをもつことができると考える。

また、「どのように学ぶのか」については、授業づくりのしかけを基に吟味するとよい。橘提案では、現在整理されている視点からしかけを考えていることから、表に位置付けている内容については有効であることが検証された。今後の提案でも、しかけの新しい視点の提案を期待したい。

◆「体験⇄価値創造」の繰り返し

創造活動は、総合的な学習の時間、道徳、特別活動の3つの領域を統合した領域である。統合する良さは、「価値を自覚していく過程と問題を解決し実践化していく過程を一体化できること」である。橘提案では、体験活動を核にして取り組むからこそ、子どもが本当に大切だと思う価値が創造されるのである。体験活動と価値創造の時間とのバランスについて再検討したい。

◆教師が根拠を問い返すことで、個々の見方・考え方を表出し、共有する（本時において）

本時の授業において、橘先生は「どうして」「なぜ」など根拠を問うことが多かった。友達の行動の根拠を想像する中にこそ、子どもの見方・考え方が表れているのである。だからこそ、教師は、想像した根拠が分かれそうなところを普段から意識し、その場面を焦点化し、全体で吟味することで、自分とは違う見方・考え方に触れるよい機会となる。そして、全体で吟味することを通して、学級（集団）にとって意味のある価値が創造される。そのように考えると、橘先生は、行動をした本人に根拠を尋ねていた。本人以外のもので行動の根拠を想像した上で、本人に根拠を語らせることが有効だったと考える。また、山森先生から指摘された「ピーマンを抜いた場面」についても、その行為の根拠についてはみんなの意見が分かれるところである。だからこそ、全体で吟味するよい場面だったと考えられる。

◆学級経営について

別紙資料として出されていた学級経営は、とても参考になる。教室環境であったり、縦割りへの帰属意識の高め方であったり、保護者との連携の仕方であったり…橘先生だからこそできるのではなく、橘実践から自分だったらどのようなアプローチができるのかを模索していくことが大切である。本校だけの特別なカリキュラムである。橘先生に習って、思い切って取り組んでいきたい。

子どもの認知モデルを基にした支援の在り方について

◆価値を創造する見方・考え方を育む方法の要件について

「気付き」「問い・願い」と「試行錯誤」「夢や憧れ」の段階に合わせて方法の要件を明らかにしようとした。討議でも話題となったが、4つのどの段階においても、価値は創造されている。その上で、橘提案としては、「気付き」「問い・願い」の段階では、体験活動を重視し、個々で価値（のもと）が育まれるようにする。そして、個々に価値（のもと）が育まれているからこそ、「試行錯誤」の段階では、体験活動に裏付けされた、子どもにとって自信のある価値だからこそ、集団で吟味する場面でも堂々と自分の価値を表出することができるのである。それぞれが自信のある価値を吟味合うからこそ、集団にとって意味のある価値を見出すことにつながるのである。このように考えると前述したように、「体験活動⇄価値創造」のバランスを考える時に、年間計画からそのバランスの在り方について考えることが大切だと考える。

◆見方・考え方を育む子どもの認知モデルについて

見方・考え方を育む子どもの認知モデルが提案された。今後、この認知モデルを基にして子どもの姿を捉えていながら検証する必要がある。このモデルから、共有しておきたいのが、創造活動においても、「収束する場面が必要である」ということである。つまり、集団で吟味することを通して、自分にとって意味のある価値が創造されるのである。では、吟味する場面をどのように位置付けていくのかは、様々な方法が考えられそうである。

成果と課題

○「何を」「どのように学び」「何ができるようになるのか」という視点から、現在の自分のプロジェクトを見直すことで、今後の支援の在り方が明らかになる。

○認知モデルを基に、収束場面を想定することで、自分にとって意味のある価値が創造される。

△「体験活動⇄価値創造」のバランスについて考えることを通して、総合・道徳・特活の3領域を統合した良さを見出していきたい。